

バスに乗って“昭和”へ行こう!

思いがけない道や地名と出合える路線バスの魅力〈前編〉

町田忍(庶民文化研究家) & 泉麻人(コラムニスト)



長距離バスに乗っての旅もいいが、バスの魅力は、こんなところ走るのか? というような路線バスにある! おまけに停留所の名は、失われた土地の記憶の碑でさえある。路線バス、そして停留所を愛してやまないお二人の対談をお楽しみください。

泉 町田さんはずっと目黒に住んでいるから、東急バス圏内ですよ。

町田 うちの近所を通る東急バスは、たしか昭和二十九年ごろから通り始めたんですよ。

泉 渋谷から洗足に行く路線ね。僕、いまでもたまに乘りますよ。

町田 渋谷71系統ね。停留所に止まっているとフカすでしょ? 子供のころ、そのときの排気ガスを目一杯吸いに行っていたの(笑)。当時はそういう刺激的な匂いがほかになくて、何というか、すごく新鮮だったんだよね。大好きだった(笑)。

泉 僕は、排気ガスはやらなかったけど、バスの新車の匂いが好きでしたね。乗用車の新しい匂いとも違うんですよ。新しいバスの匂いは、いまでも変わらず引き継がれていますね。

町田 独特だよ。部材とかシートの匂いなのかな。

泉 昔の新しいバスって、シートのビニールがかかったままのがあって、それを破いて剥がした覚えもある。

町田 それ、近所の路線バスで? 泉さんが住んでいたことだと、西武バス?

泉 当時、僕が住んでいた下落合では、西武バスと関

東バス、都営バスなんかが走っていました。それからいまでも一路線だけ残っている、中野駅から池袋に向

かう国際興業バス。なかでもよく乗っていたのは、西武バスと関東バス。杉並に住んでいるいまでも、関東バスは馴染み深いですね。

町田 最初はボンネットバスですよ。

泉 僕はたまに当たったくらい記憶なんですけれど、キャブオーバーバスって、運転手の横にエンジンが入っていたバスがあったの、覚えています?

町田 運転席の横のところが出っぱっていたやつですよ? 覚えてる。

泉 ボンネットに収まっていたエンジンを運転席の下に押し込んで、そこを無理やり箱がけしたみたいな。

町田 後部じゃなく、前の下に埋め込んだじゃった、みたいなね。トラックもあったよね。

泉 その出っぱりのところで、運転手がよく弁当箱温めていたんですよ(笑)。

町田 コカ・コーラのアルバイトしていたときに、暖房のかわりに、運転席横のエンジンルームをガバッと開けて、暖を取ったんだよ。暖かかった。

泉 あれ、昭和四十年くらいまではあったよね?

町田 あったあった。キャブオーバーって、過渡期の形なんじゃない?

泉 でもけっこう古いですよ、ボンネットよりも古い型もありますし。だから、ボンネットが必ずしもいちばん古いバスの型というわけではない。アメリカのバスを真似た「コンドル」って車種とか。

町田 僕たちは「ミンセイ」って言ったよ。

泉 この富士重工のR7型って、正面から見ると昔のテレビみたいですよ(関東バスの写真集を眺めながら)。

町田 空気取り入れ口みたいのがあってね。

泉 関東バスのボンネット型は、日産が多かったんですよ。UG590系とか。

町田 詳しいね(笑)。

泉 その後継のUG690系がいちばん思い出深い。これは、西武、関東がよく使っていた。

町田 消防自動車にもあったやつだ。でも、東急バスにはなかった。東急はトヨタじゃなか

